

【研究ノート】

ロックと反捕鯨運動

浜 口 尚

はじめに

筆者は30年以上、捕鯨文化の比較研究に取り組んできた。その一方、学術研究を始める前からロック・ミュージックに親しんできた。本稿は、捕鯨文化研究者としての立場からロックと反捕鯨運動との関係について総括したものである。

第1節では、1960年代後半のアメリカにおいて、ロック・ミュージックと社会運動が深く結びついていたことを二つのロック・フェスティバルを中心に回顧する。

第2節においては、ロック・ミュージシャンから資金提供を受け、イルカ類の解放運動をはじめた元イルカ調教師の活動の背景を検討する。

第3節では、アメリカ人反捕鯨活動家らの戦略の下、日米ほかのミュージシャンが参加して開催された日本における最初で最後の「反捕鯨ロック・コンサート」の顛末を分析する。

第4節においては、環境保護団体への資金寄付を目的として製作されたアルバム（CD）およびそれに楽曲を提供したロック・ミュージシャンを取り上げ、その社会的影響について考察する。

第5節では、日本において実施されているイルカ類の追い込み漁を脚色、曲解して製作された映画を取り上げ、その映画に出演した上述のイルカ解放活動家を取り巻く諸状況を探究する。

最終第6節においては、本稿で考察した結果をまとめたいうえで、日本捕鯨の将来を展望する。

本稿を通して、ロック・ミュージックの学術的研究の意義について多少なりともご理解いただければ、筆者としては幸甚である。

1. 花のサンフランシスコ

のちに社会学者として大成し、『サウンドのカーニバル―若者・余暇・ロックの政治学』（原著1983年、邦訳1991年）を出版するようになるサイモン・フリス（Simon Frith）は、1967年にオックスフォード大学を卒業したあと、「1曲のポップ・ソング、スコット・マッケンジーの『花のサンフランシスコ』にほだされるように」（フリス1991：12-13）、カリフォルニア大学バークレー校に留学、その地で「ロックと政治、音楽とムーヴメント、快楽と行動が解きがたく結び合った文化」（フリス1991：13）を経験する。

同じく毎日新聞社記者であった砂田一郎も1967年9月、勤務先を1年間休職し、カリフォルニア大学バークレー校に留学、構内で「反戦ロック集会」なるものに出会い、そこで「ヒッピーのロック・バンドがガンガンとロックンロールをかなりたてるなかを、ラジカル学生もリベラル学生も男女入り乱れて踊りまわり、曲の合い間合い間に反戦演説が入るという光景」(砂田1969:39)を目にし、衝撃を受ける。

同時期にカリフォルニア大学バークレー校で過ごしたこの2人の記述から、当時の社会状況の一面を読み取ることが可能である。ロック・ミュージックとベトナム反戦運動が結びつき、それが多少なりとも政治意識のある若者の行動に少なからぬ影響を与えていたのである。音楽を聴くこと(あるいは体で感じる)により、意識を変革し、そして社会を変革する。当時は、その可能性が追求されていた時代であった。その音楽体験と意識変革の一つの場を提供したロック・コンサートがある。

1967年6月、カリフォルニア州モンレーで3日間にわたって、「モンレー・インターナショナル・ポップ・フェスティバル」(Monterey International Pop Festival:以下、「モンレー・ポップ・フェスティバル」と表記)が開催された。同フェスティバルは、ジミ・ヘンドリックス(Jimi Hendrix)とフー(The Who)がはじめてアメリカにおいて大観衆の前で演奏した場として、またジャニス・ジョップリン(Janis Joplin)がはじめて大規模公演を行った場として知られている¹⁾。

最終日にトリを務めたママス・アンド・パパス(The Mamas and Papas)は、演奏の途中でスコット・マッケンジー(Scott McKenzie)を舞台にあげ、一緒に「花のサンフランシスコ」(*San Francisco (Be Sure to Wear Some Flowers in Your Hair)*)を歌い(図1)、会場を盛り上げた²⁾。同曲は、ママス・アンド・パパスのメンバー、ジョン・フィリップス(John Phillips)が作ったものであり、ヒッピー、ベトナム反戦、フラワー・パワーなど1960年代のカウンターカルチャー運動を非公式に讃えた歌とされてきた³⁾。その歌詞は次のとおりである。

If you're going to San Francisco, / サンフランシスコに行くのなら、
Be sure to wear some flowers in your hair. / 必ず髪に花をかざしなさい。
If you're going to San Francisco, / サンフランシスコに行くのなら、
You're gonna meet some gentle people there. / そこで優しい人たちに出会うだろう。

For those who come to San Francisco / サンフランシスコに来る人たちには、
Summertime will be a love-in there. / 夏はすべてを愛する集まりを提供するでしょう。
In the streets of San Francisco, / サンフランシスコの通りには、
Gentle people with flowers in their hair. / 髪に花をかざした優しい人たちがいる⁴⁾。

アメリカでは、1965年ごろから、反戦の象徴として花を用いたり、着飾ったりすることが若



図1 スコット・マッケンジーのシングル版「花のサンフランシスコ」
(*San Francisco: Be Sure to Wear Some Flowers in Your Hair*)⁵⁾

者の間で行われており、それがフラワー・パワーと呼ばれていたのである⁶⁾。その時代から半世紀以上がたち、髪に花をかざすだけで、世の中が平和になるわけではないと考えるかもしれないが、「現代社会の主流をなす想定から根原的に離脱した文化」(ローザック 1972: 56)とするカウンターカルチャーの視点に立てば、また別の世界が見えてくるのである。

1967年秋、アメリカは南ベトナムへの派遣兵の増強と北ベトナムへの爆撃を強化し、ベトナム戦争を拡大、10月初めにはアメリカ兵の死傷者数は10万人を超えた(砂田 1969: 29)。このようなベトナム戦争の激化は、アメリカ社会に多大な影響を与えた。髪に花をかざすという心の安らぎが、各自の意識を変革し、そのような人々同士の連帯により、ベトナム戦争を終結に向かわせるといふ社会変革につながる、そう信じた若者が多くいたのである。もちろん、現実とは甘くはなかった。

翌1968年、衝撃の出来事が次々と起こった。4月、マーティン・ルーサー・キング(Martin Luther King Jr.)牧師の暗殺。6月、ロバート・ケネディ(Robert Kennedy)上院議員の暗殺。8月、民主党全国大会(シカゴ)における学生デモ隊と警官隊との流血の衝突。そして11月、共和党のリチャード・ニクソン(Richard Nixon)元副大統領の大統領選挙当選である(砂田 1969: 187; 竹林 2019: 5)。5年前に「私には夢がある」(I have a dream)⁷⁾と高らかに演説したキング牧師の謀殺をきっかけに、意識変革による社会変革を信じた若者の夢は打ち砕かれたのである。

1969年はさらに悪かった。同年2月、本節冒頭で取り上げたロックと政治が結びつき、様々な学園闘争の中で学生が自由を謳歌していたカリフォルニア大学バークレー校に対して、当時のロナルド・レーガン(Ronald Reagan)カリフォルニア州知事(のちの第40代アメリカ合衆国大統領)が非常事態を宣言、大学紛争の鎮圧に乗り出している(渡辺 2000: 126)。さらに1969年は、アメリカにとってベトナム戦争がもっとも泥沼化した年で、ベトナムに駐留するアメリカ軍関係者の数が54万9500人という頂点に達し、アメリカ兵の死者が1万1780人にのぼった(ヤン 2019: 155)。アメリカの若者世代にとっては、同年はベトナムで死ぬか、それとも国内(学内)で弾圧されるか、まさに内憂外患の時代であった。

そのような暗黒の1969年において、「花のサンフランシスコ」で歌われた「愛と平和の世界」

を 30 万人、40 万人あるいは 50 万人ともいわれる若者を集めて実現したのが⁸⁸⁾、同年 8 月、ニューヨーク市郊外において 3 日間にわたって開催された「ウッドストック・ミュージック・アンド・アート・フェア」(Woodstock Music and Art Fair: 以下、「ウッドストック・フェスティバル」と表記)であった。

このウッドストック・フェスティバルには、モンレー・ポップ・フェスティバルにも出演していたジミ・ヘンドリックス、フー、ジャニス・ジョップリンらも出演したが、両フェスティバル間の 26 か月にベトナム戦争が激化していた分だけ、コンサート自体もより政治化(反戦化)していた。そのことを象徴する楽曲が 2 曲ある⁹⁾。

その 1 曲は、カントリー・ジョー・マクドナルド (Country Joe McDonald) の「アイ・フィール・ライク・アイム・フィクシン・トゥ・ダイ・ラグ」(*I Feel Like I'm Fixin' to Die Rag*) である。その歌詞の一部を以下に掲げておく。

And it's one, two, three, / 1、2、3。

What are you fighting for? / お前は何と闘っているの?

Don't ask me, I don't give a damn, / 俺に聞くなよ。どうでもいいよ。

Next stop is Viet Nam. / 次はベトナム。

And it's five, six, seven, / 5、6、7。

Open up the pearly gates, / 天国の門をあけなよ。

Well there ain't no time to wonder why, / 理由を考えている時間などないよ。

Whoopee! We're all gonna die. / どうせすぐに死ぬのだから¹⁰⁾。

誰が聴いてもわかるベトナム反戦歌である。この曲を作ったカントリー・ジョー・マクドナルドは、日本勤務歴もある元軍人の自称コミュニスト。貧しい労働者であった両親もコミュニストで、その息子にスターリンから名前をいただき、ジョゼフ・スターリン・マクドナルド(カントリー・ジョーの本名)と名づけたそうである(中村 1977: 35)。ミュージシャン兼筋金入りの活動家で、歌だけで理想を語る夢想家ではない。それゆえ、一般大衆も彼の歌を支持するのであろう。記録映画には聴衆がこの曲に合わせて合唱する場面も収録されており¹¹⁾、若者(特に男性)の切実感が伝わってくるのである。

もう 1 曲は、ジミ・ヘンドリックスによるアメリカ合衆国国歌「星条旗」(*The Star Spangled Banner*) の演奏である。音楽評論家の大鷹俊一は、この演奏について「明らかにこのフェスのラヴ&ピースを掲げた精神へのリスペクト、集まった人々の反戦等への思い、ヴェトナムに行っている人々や仲間たち、人種差別問題(公民権運動)で対立を深める人々へのメッセージをこの曲のパフォーマンスに込めた」(大鷹 2019: 110)と絶賛している。一ロック・ファンにすぎない筆者には、DVD や CD から本演奏の意味をそこまでは読み取れなかったが、アフリカ

系アメリカ人とアメリカ先住民の両親の下に生まれ、軍隊勤務歴もあるヘンドリックスの経歴¹²⁾を考え合わせたならば、ノイズにまみれた合衆国国歌の演奏に込められた彼の複雑な心情を理解することができるのである。

1960年代後半、アメリカにおいてはロックと社会運動が深く結びついていたのである。

2. イルカに魅せられて

前節の最後に取り上げたウッドストック・フェスティバルの共同主催（製作）者の一人がマイケル・ラング（Michael Lang）である。共同主催者間の内紛から、フェスティバルの音楽映像出版権を手放したため、最終的に彼は儲け損なったようであるが（マコーワー 1991：465-476；ラング 2012：385-388）、同フェスティバルの成功により、その後の人生を元ウッドストック主催者の肩書きで暮らしていけるだけの名声は得ている¹³⁾。

そのラングは、ウッドストック・フェスティバル前年の1968年、当時住んでいたフロリダ州マイアミで、モントレイ・ポップ・フェスティバルの成功に刺激を受け、一発当てようとジミ・ヘンドリックスほかを招聘し、「マイアミ・ポップ・フェスティバル」（Miami Pop Festival）を開催している。同フェスティバルは、2日目に雨にたたられたため大赤字となり、興行目的会社は倒産している（ラング 2012：44-56）。このラングとともに興行目的会社を立上げ、一緒にこけたのが、ラングの近所に住む当時はイルカの調教で生計を立てていたもう一人の山師リック・オバリー（Ric O'Barry）¹⁴⁾であった（ラング 2012：43-44）。以下、そのオバリーを取り上げる。

オバリーは1960年からマイアミ水族館においてイルカの調教師を務め、1964年以降はテレビ番組『わんぱくフリッパー』（*Flipper*）¹⁵⁾に出演するイルカ類の捕獲およびその調教に従事していた。しかしながら、1969年にお気に入りのイルカが彼の腕の中で死んだことに衝撃を受け、イルカ解放活動家への転向を決意している¹⁶⁾。

1970年春、イルカ解放活動家に転向したオバリーは、バハマ諸島において金網で仕切られた囲いの中で飼育されていた1頭のイルカを、金網を切断して逃がそうとして失敗、逮捕・起訴され、罰金5ドルと国外退去処分を受けている（オバリー 1994：第1章、第2章）。そして同年4月、ミュージシャンのフレッド・ニール（Fred Neil）とスティーヴン・スティルス（Stephen Stills）から資金提供を受け（オバリー 1994：304-306）、捕えられて飼育下にあるイルカ類の解放を目的とし、イルカ類への搾取と虐待の根絶を使命とするイルカ類解放団体「ドルフィン・プロジェクト」（Dolphin Project）を設立している¹⁷⁾。

では、オバリーのドルフィン・プロジェクトに資金提供したフレッド・ニールとスティーヴン・スティルスとはどういう人物、ミュージシャンであったのだろうか。まずはニールである。筆者の理解する限り、イルカ類にもっとも早くから関心を寄せていたミュージシャンがニールである。ニールはオバリーの調教下にあったイルカ類を訪ね、イルカ類に音楽を聞かせるために12弦ギターを演奏、イルカ類も水から頭を突き出し、その音楽に聴き入っていたとのことであ

る（オバリー 1994 : 147）。オバリーの話なので誇張があるかもしれないが、ニールは純粋にイルカ類が好きで、彼（彼女）らと音楽を通して交流したかったのかもしれない。

ニールが 1966 年に発表した歌に「ザ・ドルフィンズ」(*The Dolphins*)がある。この曲は、リンダ・ロンシュタット (Linda Ronstadt) やティム・バックレー (Tim Buckley) なども取り上げており¹⁸⁾、ニールの代表曲の一つとなっている。その歌詞は次のとおりである。

This world may never change the way it's been, / この世界は辿ってきた道りを変えられず、
And all the ways of war can't change it back again. / どのような戦争もその世界を元に戻せない。

And I'm searchin' for the dolphin in the sea. / 私は海の中のイルカを探している。

Sometimes I wonder do you ever think of me. / 時々、イルカが私のことを考えているのかと思うことがある。

I'm not the one to tell this world how to get along. / この世界がうまくいく方法などは語れない。

I only know that peace will come when all hate is gone. / 全ての憎しみがなくなれば、平和が来ることだけは知っている。

And I'm searchin' for the dolphin in the sea. / 私は海の中のイルカを探している。

Sometimes I wonder do you ever think of me. / 時々、イルカが私のことを考えているのかと思うことがある¹⁹⁾。

これは反捕鯨（反イルカ漁）の歌ではないことは確かである。政治的意図が込められているとするならば、反戦平和、反民族主義の歌かもしれない。そうでないとすれば、イルカとの交流を通して心の安らぎを求める歌なのであろう。多分、ニールは心の優しい人であった。それは、この曲が含まれている CD のジャケットをみればわかるのである（図 2）。

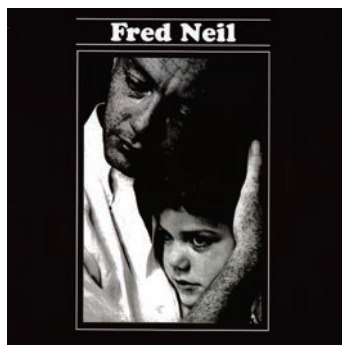


図 2 フレッド・ニールの CD 『フレッド・ニール』 (*Fred Neil*)²⁰⁾

これに対して、よくわからないのが、スティルスとイルカとの関係である。時にクロスビー、スティルス&ナッシュ (Crosby, Stills & Nash) としてグループ活動する際の共演者デヴィッド・クロスビー (David Crosby) とグレアム・ナッシュ (Graham Nash) には反捕鯨の歌があるが (この曲については次節で取り上げる)、スティルスにはイルカやクジラについて歌っている曲はない (多分)。スティルスの代表曲といえば、元恋人のジュディ・コリンズ (Judy Collins) のことを歌った「組曲：青い眼のジュディ」(Suite: *Judy Blue Eyes*) で、この曲はクロスビー、スティルス&ナッシュとしてウッドストック・フェスティバルでも歌っている²¹⁾。

1960年代半ば、ニールとスティルスはニューヨーク、グリニッジ・ヴィレッジで活動し、古くから友人関係にあったことが知られており、1971年にはマジソン・スクエア・ガーデンで開催されたスティルスのコンサートにニールがゲスト出演している²²⁾。また音楽評論家の北中正和によれば、1975年に彼がバークレーに短期滞在していたとき、スティルスのコンサートに行き、スティルスによるニールの曲「うわさの男」(*Everybody's Talkin'*) の弾き語りを聴いている (北中 1976: 294)。その「うわさの男」は、クロスビー、スティルス&ナッシュの1969年のデビュー・アルバム「クロスビー、スティルス&ナッシュ」(*Crosby, Stills & Nash*) が2006年に再発売された際、ボーナス・トラック (もちろんリード・ボーカルはスティルス) として追加収録されている²³⁾。

結局のところ、イルカに対する関心よりもニールとの個人的な関係がスティルスをして、オバリーのドルフィン・プロジェクトの支援に向かわせたと考えられるのである。

最後にオバリーに戻って、本節を終えたい。「フリッパー役のイルカの訓練をしていたころ、フレッド・ニール、ジョニ・ミッチェル、デヴィッド・クロスビー、ママズ・アンド・パパズの仲間など、私の友人のミュージシャンたちがよく遊びに来た」(オバリー 1994: 147)。「ロックスターのデヴィッド・クロスビーは、カリフォルニアのミルヴァレーの本拠から1000ドルの小切手を送ってくれた」(オバリー 1994: 316)²⁴⁾。「私はスティーヴン・スティルスをはじめ6人ほどのミュージシャンに電話をかけ、資金不足でドルフィン・プロジェクトが危機に瀕していることを知らせた。彼らはしていた仕事を放りだして助けに来てくれた。〔中略〕一晩のコンサートで1万5000ドルも集まった」(オバリー 1994: 333-334)。オバリーもまたラング同様、ロックが (うまくいけば) 金になることを十分認識していたのである。

3. クジラに踊らされーローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン・コンサート 1977ー

第1節、第2節においては、1960年代後半、アメリカではロックと社会運動が深く結びついていたこと、またうまくいけばその結びつきが金になることをみてきた。では、1970年代はどうであったのだろうか。

1970年5月、オハイオ州セント州立大学構内において反戦運動中の学生4人が州兵によって射殺され (五十嵐 2019b: 51)²⁵⁾、1970年代も衝撃の幕開けとなった。またモントレイ・ポッ

プ・フェスティバル、ウッドストック・フェスティバルの双方に出演し、ロックスターとしての地位を築きつつあったジミ・ヘンドリックスとジャニス・ジョップリングが、ともに27歳で9月と10月に薬物の影響とも噂されるなかで立て続けに亡くなっている（室矢2017:135）。

その一方、1960年代後半、アメリカ各地を紛争の渦に巻き込んできたベトナム戦争は1970年代に入ると終結に向かい始め、1973年1月27日にパリ和平協定が調印され、同年3月29日、アメリカ軍は少数の軍事顧問団を除いてベトナムからの撤兵を完了させている（松岡2001:50-51）。アメリカ軍撤退後もベトナムの地では民族解放戦線軍とベトナム共和国（南ベトナム）軍との戦闘は続いたが、アメリカ社会においてはベトナム反戦運動は徐々に終息していった。

そしてそのアメリカ社会が平静を取り戻すのと軌を一にする形で、環境保護運動が勢いを得てくる。1970年10月、ジョニ・ミッチェル（Joni Mitchell）はジェームズ・テイラー（James Taylor）やチリワック（Chilliwack）らとともに環境保護団体グリーンピースの前身である「震動を起こすな委員会」（Don't Make a Wave Committee）を支援するためのコンサートを開催、1万7000ドルを同団体に寄付している²⁶⁾。活動資金を入手したグリーンピースは1971年9月、アメリカ合衆国政府によるアラスカ州アムチトカ島での核実験に反対するため、同団体の直接行動の第一回目として同島に向けて抗議船を出港させている（ブラウン&メイ1995:21-22）。前節で取り上げたイルカ解放活動家リック・オバリー同様、活動資金に困れば、ロック・ミュージシャンに頼るという構図がここでもみられるのである。グリーンピースとロック・ミュージシャンとのかかわりについては改めて第4節で言及する。

その環境保護運動と反捕鯨運動との結びつきが目にみえる形で明らかになったのが、1972年6月、スウェーデンの首都ストックホルムで開催された第1回国連人間環境会議において、「商業捕鯨の10年間モラトリアム（一時停止）勧告」が採択された時である。これ以降、クジラは環境保護の象徴として取り扱われるようになっていく。

このモラトリアム勧告の採択については、水産ジャーナリストの梅崎義人が、ベトナム戦争における枯葉剤使用による環境破壊から世界の目をそらすために、アメリカ合衆国政府が捕鯨問題を取り上げさせたとするアメリカ陰謀説を唱え（梅崎1986:29-35）²⁷⁾、最近では2018年から2019年に「国際捕鯨委員会」（International Whaling Commission: IWC）議長を務めた森下丈二もほぼ同一の言説を繰り返している（森下2019:3-4）。これに対して、国際関係論が専門の真田康弘は外交文書の分析に基づき、アメリカ陰謀説は、日本の反モラトリアム外交の失敗と国連人間環境会議での対応の誤りを隠蔽するために官僚らによって作り上げられたとする、もう一つの陰謀説を唱えている（真田2011:86-89）。

環境保護運動や反捕鯨運動はベトナム反戦運動よりも敷居は低いし、安全度も高い。誰でも簡単に取り組める。反戦運動中の学生たちが州兵によって射殺された事件については先に述べたが、アメリカ合衆国内において環境保護運動や反捕鯨運動に参加して警官や州兵によって射殺されたという話は寡聞にして知らない。ミュージシャンにとってもそれは同じである。気軽にできて、知名度が上がるのであるならば、反戦運動よりも環境保護運動や反捕鯨運動のほうがよい。

社会に受け入れられる余地が広く、レコード（当時）も売れる。北中正和によれば、1974年には反捕鯨運動のためのコンサートがさかんに行われたとある（北中 2017: 181）。挫折したカウンターカルチャー運動の行き着いた先が反捕鯨運動であった。

1977年4月、アメリカから輸入される形で日本において最初の（そして多分最後の）の反捕鯨ロック・コンサートが開催された。それが「ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン・コンサート 1977」(Rolling Coconut Revue Japan Concert 1977)（以下、「ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサート」と表記）であった。本節後半において、その反捕鯨コンサートを取り上げるが、その前に1977年当時の日本の捕鯨を取り巻く状況を振り返っておく。

世界の捕鯨を直接管理しているのは『国際捕鯨取締条約』(*International Convention for the Regulation of Whaling*: ICRW) とそれに基づいて設立された国際捕鯨委員会であり、第1回国連人間環境会議において採択された「商業捕鯨の10年間モラトリアム勧告」は日本の捕鯨にすぐに直接的な影響を及ぼすものではなかった。しかしながら、それが正しかろうが、誤ってようが、鯨類は食料資源・産業資源ではなく、環境保護の象徴として取り扱われるようになり、国際捕鯨委員会においても、毎年商業捕鯨用の捕獲枠が減らされる流れになっていったのである。

日本において食利用されていた鯨類の中でもっとも好まれてきたナガスクジラについては、1976年漁期以降、北太平洋における捕獲が禁止され (IWC 1977a: 14)、1976-77年漁期以降、南半球における母船式捕鯨も禁止されている (IWC 1977c: 34)。その結果、北太平洋における1975年漁期の129頭 (IWC 1977b: 17) と南半球での1975-76年漁期の118頭 (IWC 1977b: 16) を最後に、日本はナガスクジラの捕獲の断念に追い込まれていたのである。

ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートが開催された1977年についていえば、南半球の1976-77年漁期において、日本はイワシクジラ1237頭、ニタリクジラ225頭、ミンククジラ（現在のクロミンククジラ）3950頭、マッコウクジラ234頭、計5646頭を捕獲しており (IWC 1978: 9 Table 3)、北太平洋の1977年漁期では、ニタリクジラ500頭、ミンククジラ248頭、マッコウクジラ3078頭、計3826頭捕獲している (IWC 1979: 11 Table 6)。南半球と北太平洋の捕獲数合計は9472頭となり、同漁期のソビエト連邦（当時）の捕獲数合計1万1953頭 (IWC 1978: 9 Table 3; 1979: 11 Table 6) に次ぐ世界第2位の捕鯨国であったのである。

ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサート自体は1977年4月、東京・晴海において日米ほか計32組のミュージシャンが参加し、3日間にわたり開催されたが（北中 1977b）、物語は1976年7月、サンフランシスコのグリーンピースに所属していたマーク・ラヴェル (Mark Lavelle) が活動資金への援助を求めてリック・オバリーに一本の電話をかけたことから始まる（オフエルトマン 1976: 24）。

ラヴェルは、慶應義塾大学や国際基督教大学において学んだことがあり²⁸⁾、またサンフランシスコの日本国総領事館で開催された日本語弁論大会に出場し、「クジラを救おうキャンペーン」について語ったこともある人物である²⁹⁾。反捕鯨ではあるが、日本叩き一辺倒では捕鯨問題は解決できないと考えていたようであり（岩永 1982: 80）、日本に行き、彼なりに相互理解の手立て

を探るために資金面でオバリーを頼ったのであった。

オバリーにとってはミュージシャンが打ち出の小槌である。1976年8月、フレッド・ニールやジョン・セバスチャン（John Sebastian）（この人もウッドストックに出演していた）を中心に資金調達コンサートを開催し、6500ドルの小切手をラヴェルに手渡したのであった（オフエルドマン 1976:25）。このラヴェルとオバリーが結びついたあたりから、日本でクジラとイルカのために、日本のミュージシャンとともにコンサートを開こうという考えが生まれてきたようで、同年9月、ラヴェルやオバリーが事前準備のために日本にやってくる（オフエルドマン 1976:25）。

このローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートについて、アメリカ側は当然のことながら「反捕鯨のためのコンサート」であったが、捕鯨大国日本に住む日本側主催者はその方針を容認するわけにはいかなかった。日本側主催者の一人、浜野サトルは「鯨の存在は私たちの生活の歴史においてたえずひとつの『資源』であった」（浜野 1977:54）と語り、捕獲数 9472 頭の重みを認めている。

結局、日本側主催者は、鯨をきっかけにして、世界の海の問題（乱獲や汚染など）を考える場を提供するという落とし所を捻り出し、「The Seas Must Live」をコンサートのテーマとして選んでいる（浜野 1977:54）。そしてその日本側主催者の意向に沿う形で、コンサートの2日目には水俣病の研究者、宇井純も舞台に上がり、アピールを行っている（北中 1977b:46）。この日本側の苦心策もアメリカ側には通じなかったようで、3日間のプログラムは「あまりにも鯨問題に焦点をあてすぎたスピーチの連続」（浜野 1977:54）となった。

さて、そのコンサートである。初日はクジラのフィルムを背景にして、リック・オバリーの短いあいさつから始まり、最後にフレッド・ニール、ジョン・セバスチャンを中心メンバーとするローリング・ココナッツ・レビュー・バンドが登場し、ニールの「ザ・ドルフィンズ」（歌詞は第2節参照）などを歌って幕を閉じた（北中 1977b:43, 45-46）。まさにイルカで始まり、イルカで終わった一日であった。

2日目は、ダニー・オキーフ（Danny O'Keefe）が「セイブ・ザ・ホエールズ」（*Save the Whales*）を歌っている（DPJCC 2018:11）。そのおかしな歌詞を彼の CD（図3）からみておこ



図3 ダニー・オキーフの CD 『ザ・グローバル・ブルーズ』（*The Global Blues*）³⁰⁾

う。

Was I dreaming? / 私は夢を見ていたのだろうか？

I heard the great whales crying. / 偉大なるクジラたちの絶叫を聞いた。

Saying, Brother, Brother. / 兄弟よ、兄弟よ、

We are dying. / 私たちは死につつある、と語っていた。

Taiyo no komodo tachi. / 太陽の子供たちよ。(下線筆者)

Minna-de kujira-sukuo. / みんなでクジラを救おう³¹⁾。

(Children of the sun, help us save the whales.)

日本語で日本人に語りかけようとする熱意は買うが、それならば正しい日本語を使ってもらいたい。下線を引いた単語「komodo」は「kodomo」の誤りである。「コモド」ならば、「オオトカゲ」を思い浮かべてしまう。彼らの日本に対する理解は所詮、この程度なのである。そこから判断すれば、日本の捕鯨に対する理解も皮相的なものと考えられるのである。

2日目のトリを務めたのがジャクソン・ブラウン (Jackson Browne) である。自分の持ち歌に加えて、「今日ここに来られなかった友達の歌を」(北中 1977b : 48) として、クロスビー & ナッシュの反捕鯨の歌「ウインド・オン・ザ・ウォーター」(To the Last Whale/Wind on the Water) も歌っている。その歌詞をみてみよう。

Over the years you have been hunted by the men who throw harpoons. / 長年にわたって、あなたは鉾手によって捕殺されてきた。

And in the long run he will kill you, just to feed the pets we raise. / 結局、私たちが飼育するペットの餌のために、彼はあなたを殺すであろう。

Over the years you swam the ocean following feelings of your own. / 長年にわたって、あなたは自分自身の気持ちに従って、大洋を泳いできた。

Now you are washed up on the shoreline. I can see your body lie. / 今では、あなたは海岸線に打ち上げられている。あなたの体が横たわっているのが見える³²⁾。

北中正和は、この歌が「彼の演奏の中ではいちばん聞きものだった」(北中 1977b : 48) としているが、日本人聴衆のどれくらいが歌詞の内容を正確に理解していたのかは不明である。実はジャクソン・ブラウンは、ローリング・コナッツ・レビュー・コンサート直前の3月にも来日し、東京、横浜、大阪で6回のコンサートを開いている。3月24日、大阪フェスティバルホールにおいて開催された彼のコンサートへは筆者も足を運んでいる(図4)。なにぶん40年以上前



図4 ジャクソン・ブラウン大阪公演入場券（1977年3月24日）

の話なのでコンサート自体の記憶は飛んでいる。わずかに1曲目に彼の代表曲の一つ「テイク・イット・イージー」(*Take It Easy*)を歌い、「もうやるの……」と思った記憶が残っている程度である。

音楽評論家の当時のコンサート評を読み返してみれば、ドラッグや、自殺した妻、残された息子のことなど、自分の身の回りのできごとを歌っており、反捕鯨にはまったく触れていなかった(後藤1977; 北中1977a)。プロのミュージシャンとして営業用の活動と社会啓蒙活動は分けていたのであろう。ブラウンは社会啓蒙活動の一環としてローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートの舞台に上がったが、大多数の日本人聴衆は営業用の彼を目当てにコンサートに来ていたのである。たとえ、「ウィンド・オン・ザ・ウォーター」で会場は盛り上がっていたとしても、それは雰囲気だけで、ミュージシャン側の反捕鯨メッセージはまったく伝わっていなかったと考えられるのである。

なお余談ではあるが、ダニー・オキーフとジャクソン・ブラウンの合い間に日本人のフォーク歌手、イルカも出演したが、名前だけで出たようなもので(リック・オバリーのショーにはピッタリであるが……)、「歌そのものにはあまり関心が持てずに困ってしまった」(北中1977b: 47)とは、当時のコンサート評である。

最終3日目の午前の部には、モントレイ・ポップ・フェスティバル、ウッドストック・フェスティバルに出演し、ベトナム反戦歌「アイ・フィール・ライク・アイム・フィクシン・トゥ・ダ



図5 カントリー・ジョー・マクドナルドのCD『パラダイス・ウィズ・アン・オーシャン・ビュー』(*Paradise with an Ocean View*) (右下部に噴気をあげている鯨が描かれている)³³⁾

イ・ラグ」を絶唱したカントリー・ジョー・マクドナルドが登場、同曲も演じたが、新たに反捕鯨の歌「セイブ・ザ・ホエールズ」(*Save the Whales!*)を披露している。同曲は1975年に発表された彼のアルバム(筆者は後にCDで購入)に所収されている(図5)。先に取り上げたダニー・オキーフの歌とは同名異曲であり、歌詞にも内容がある。

Lots of whales in the deep blue sea and we kill them for the industry. / 真っ青な海には多くの鯨がいる。私たちは産業のために鯨を殺す。

We drag 'em alongside and cut 'em in two. Melt 'em down and sell 'em to you. / 船の横に鯨を引き寄せ、解体する。脂皮を溶かして鯨油を作り、販売する。

There hardly is a sailor alive who can keep the tears from his eyes. / 泣かない鯨捕りはほとんどいない。

As he remembers the good old days when there were no whales to save. / なぜならば、古き良き時代には鯨がたくさんいたことを覚えているので。

Now we can thank the companies for scouring the deep blue seas. / 真っ青な海を探し回った会社のおかげです。

Looking for ivory and perfume and oil to light your living rooms. / 工芸用の鯨骨、香水の材料、そして部屋を明るくする鯨油を求めて³⁴⁾。

コミュニストを自称し、ベトナム反戦運動にかかわってきたマクドナルドは、単なるクジラ好きのミュージシャンではない。彼は社会構造の理解の下、自らの行動を導き出している。捕鯨についても、アメリカ捕鯨産業が鯨油精製のために成り立っていたことなど、アメリカ捕鯨産業史を正しく理解している。先に取り上げたクロスビー&ナッシュが、ペットに与える餌のためにクジラを殺すと歌っていたのとは好対照である。

本節冒頭で、アメリカ社会においてベトナム戦争が終息に向かうにつれて、環境保護運動や反捕鯨運動が盛んになってきた、それは当該運動が反戦運動よりも誰もが簡単に取り組めるからであり、またミュージシャンにとっては知名度が上がり、金も稼げるからであるという主旨を述べておいた。このことは、ダニー・オキーフやジャクソン・ブラウン、クロスビー&ナッシュらにはあてはまるが、ベトナム反戦歌手のマクドナルドにはあてはまらないであろう。

では、なぜ彼が反捕鯨の歌を作ったのであろうか。時流にあわせただけではないとするならば、何らかの考えがあったはずであるが、それがよくわからないのである。ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートにかかわるインタビューにおいて、マクドナルドは「ぼくが愛するのは真理だけです。別にクジラを愛しているわけではありません。ただ、動物を殺すのは嫌いです。クジラを殺すことは、ベトナムで行われた[の]と同じような暴力行為だと思うんです。そ

つくりですよ、ベトナム人を殺すやり方とクジラを殺すやり方と……」(中村 1977: 37) と語っている。

ヒトもクジラも同じ動物であるから(この場合の動物は「哺乳動物」の意味。ノミヤゴキブリまでは含まれていません。念のため)、殺すのは嫌いという彼の考えもそれなりに理解はできるが、文化人類学を専攻する筆者は人間と鯨の間に境界線を引きたい。それゆえ、筆者は生活のために鯨を殺すことを一つの生き方として擁護している。

3日目午後の部には、ピーター・ローワン・バンド(Peter Rowan Band)が出演し、「クジラワイキル、クジラワイキルウ」という歌詞の入った曲を披露したようであるが(北中 1977b: 50)、残念ながら、筆者はその歌を知らなかった。

3日間のコンサートのトリは、フュージョン・バンドのスタッフ(Stuff)であった。スタッフについて、反捕鯨運動との関係で特に言うことはない。ただ、当時スタッフのマネージャーは、リック・オバリーとともにマイアミ・ポップ・フェスティバルを主催、見事にこけ、ウッドストック・フェスティバルでは成功するも、音楽映像出版権を手放し、金を儲け損ねたマイケル・ラングが務めており、一緒に来日していたことだけは記しておきたい。基本的に参加ミュージシャンには出演料は支払われなかったが、カントリー・ジョー・マクドナルドによれば、スタッフだけには支払われたとのことである(中村 1977: 39)。

では、この3日間のローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートをどのように評価するのか。それは、評価の視点により異なるであろう。

まず、興行面である。コンサート終了直後に日本側主催者(ドルフィン・プロジェクト・ジャパン・コンサート・コミッティー)の一員であった浜野サトルが「概算赤字 3000 万円という苦しい現実があります」(浜野 1977: 53)と述べ、5年後には同じく主催者の一員であった岩永正敏も「コンサート前後の経費だけで約 3000 万円の赤字が明らかになっていた」(岩永 1982: 95)と語っている。その一方、41年後(2018年)発売のローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートを収録した14枚組みCDセット³⁵⁾の付録ブックレットには「結局、このベネフィット・コンサートの収支は大赤字となり、〔中略〕大きな借金を抱え、10年以上その返済に追われる結果を生んだ」(DPJCC 2018: 6)と記されている。

これらの記述から理解できることは、コンサート終了後十数年で全体としての日本側主催者は損益分岐点に達し、その後は利益を生んでいるという事実である。もっとも、ジャパン・コンサート・コミッティーは法人ではなかったもので、それを組織した各個人には、個人で立て替えた借金が残ったかもしれないが……。マイケル・ラングとともにウッドストック・フェスティバルを主催し(彼らは興行目的会社を設立していた)、ラングとは異なり、フェスティバル終了直後の赤字に耐え、音楽映像出版権の一部を保持し続けた人物も偶然かもしれないが、「実際に収支がとんとんになるまでに11年かかったんです」(マコーワー 1991: 473)と語っている。長期的にみれば、大規模ロック・コンサートの主催者は、法人を設立してコンサートを主催し、音楽映像出版権を保持できれば、儲けることも可能なのである。

2018年に発売された14枚組みCDセットは定価が1万9800円(税込み)であった。筆者も購入したが、高かった。41年間の経験を踏まえて、利益が出るあたりの価格としてこの定価をつけたのであろう。また利益が出ると見込んでいるからこそ、CDセットの付録ブックレットの最終ページに「このCDボックスの売り上げの一部を、公益社団法人日本環境教育フォーラムの活動を支援するために、寄付します」(DPJCC 2018: 96)と記されているのである。

結局のところ、2020年の現在からみれば、ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートは興行的に成功したといえるのである。

次は、反捕鯨運動面である。もともと日本側主催者は反捕鯨運動にはほとんど関心がなく、反捕鯨を強硬に主張するアメリカ側主催者との狭間で窮余の妥協策「The Seas Must Live」というテーマを捻り出した経緯もあり、反捕鯨運動としてのローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートには成功も失敗もなかった。このコンサートをきっかけにして日本において反捕鯨運動が高まっていったという事実もない。日本における反捕鯨運動史においては、単発的な出来事であったと結論づけられるのである。

筆者が知る限りでは、ポピュラー音楽研究者の大瀧徹が日本で唯一このローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートを学術的に考察している(大瀧 2016; 2020)。大瀧は、日本側主催者の多くは1960年代後半にベトナム反戦運動など各種のカウンターカルチャー運動にかかわった人物であり、必ずしも反捕鯨ではなかったが、彼らは「新しい社会運動」を表出する場としてローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートを捉えて活動していたとし、彼らの活動に一定の評価を与えている(大瀧 2020: 16-19)。そのうえで大瀧は、彼らの新しい社会運動の可能性が1980年代以降、どのように継承されたのかについての検討は今後の課題にしたいと述べている(大瀧 2020: 19)。日本において2番目にローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートを学術的に取り上げた筆者としては、大瀧の続編を楽しみにしている。

一方、アメリカ側主催者の中には、日本における反捕鯨運動において成功する手がかりをえたと考えられる人物が少なくとも一人はいる。リック・オバリーである。準備段階での来日を含めて、このコンサートをきっかけにして日本において知己を得たオバリーは、その後40年間にわたって日本において反捕鯨運動(反イルカ漁運動)にかかわっていくのである。アメリカにおけるオバリーの活動については第2節で取り上げたが、日本における彼の活動については第5節において再度取り上げる。従って、アメリカ側からみれば、反捕鯨運動としてのローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートには一定の成果があったといえるのである。

4. 虹の戦士とロック・ミュージシャン

前節において、グリーンピースはジョニ・ミッチェルやジェームズ・テラーらからの資金援助により、その活動を開始したことを述べておいた。1970年代の創設期においては、反核実験と反捕鯨がグリーンピースの活動の中心であったが(ハンター 1985; ブラウン&メイ 1995)、

「国際環境 NGO」を自称するようになった現在（2020年）、事業対象分野を気候変動・エネルギー問題、海洋生態系、森林、食と農業、原子力、有害物質などに広めている³⁶⁾。

過去には（2005–2006年漁期）、南極海においてグリーンピースの船が、日本の鯨類捕獲調査母船の船腹に、船首から突っ込むなどの過激な反捕鯨活動を行ったこともあるが（石川 2011：172 図 52）、近年はどのようなのであろうか。

グリーンピース・ジャパンは、2018年11月12日付けで「アイスランドから日本への絶滅危惧種ナガスクジラの違法取引に反対」とする声明を発表している³⁷⁾。以下、その一部を引用しておく。なお、考察の便宜上、引用部の前に (a), (b) を付記している。

(a) アイスランドは今年捕獲した 147 頭のナガスクジラの肉 1500 トンを現在日本へ海上輸送しており、これは、ワシントン条約の合意をないがしろにしていることになります。（下線筆者）

(b) ナガスクジラはシロナガスクジラに次ぐ大型鯨類で、体長は 25 メートル以上になることもあり、商業捕鯨によってその数が激減して以来、絶滅危惧種とされています。（下線筆者）

まず、(a) のアイスランド産鯨肉の日本への輸出は、「ワシントン条約の合意をないがしろにしていることになります」についてである（図 6）。ナガスクジラは、『絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約』（*Convention on International Trade in Endangered Species of Wild Fauna and Flora*：CITES）（通称『ワシントン条約』）において、「附属書 I」に掲載され、商業取引は原則的に禁止されている³⁸⁾。しかしながら、アイスランドも日本もナガスクジラの「附属書 I」への掲載には留保を付しており³⁹⁾、両国間の商業取引は可能となっている。留保は条約締約国に認められている権利であり、ワシントン条約の合意をないがしろにしているとするグリーンピースの根拠はどこにもないのである。



図 6 陸揚げされたナガスクジラ（アイスランド、2018年7月28日、筆者撮影）

次に、(b) のナガスクジラが「商業捕鯨によってその数が激減して以来、絶滅危惧種とされています」についてである。「国際自然保護連合」(International Union for Conservation of Nature: IUCN) は、2018年11月14日、世界全海域におけるナガスクジラの生息数は1970年代以降倍増し、その成体はおおよそ10万頭に達しているという事実に基づき、IUCN レッドリストを改訂、ナガスクジラを「絶滅危惧種」(Endangered) から「危急種」(Vulnerable) に格下げしている⁴⁰。グリーンピース・ジャパンが声明を発表したのが国際自然保護連合の発表2日前であったので、発表時点では虚偽ではなかったかもしれない。しかしながら、筆者がこの声明をグリーンピース・ジャパンのホームページ上で最後に閲覧したのが2020年10月11日である。当初の声明発表からほぼ2年間にわたって、声明が削除されず、また修正も加えられていないということは、意図的に虚偽の情報を流し続けている、あるいは不利な事実を隠蔽していると判断できるのである。

以上の事実から、かつてのように過激ではなくなったかもしれないが、近年においてもグリーンピースは反捕鯨団体なのである。以下、そのグリーンピースとロック・ミュージシャンとの深いつながりを示す一組のCDを取り上げる。

1989年3月、ソビエト連邦(当時)において『グリーンピース—前進』という表題の25曲入り2枚組みアルバムが発売され、その印税がモスクワとキエフにグリーンピースの事務所を設立するのに役立つとされている(ブラウン&メイ 1995:264)。その後、同アルバムは『レインボウ・ウォリアーズ(虹の戦士)』と名前を変え、テープとCDを含めて、東西両側のほとんどの国で販売され、グリーンピースに相当な収益をもたらしている(ブラウン&メイ 1995:265)。

日本版CDは全31組のミュージシャンによる31曲入りとなり、『グリーンピース・エイド—地球の自然保護と調和』という邦題が付き、1989年6月にポニーキャニオンから発売されている(税込み定価3378円)(図7)。

それにしても、この「グリーンピース・エイド」という邦題はいかがなものか。アフリカにおける飢饉救済を目的とした慈善プロジェクト「バンド・エイド」(1984年)や同じ目的の慈善コンサート「ライブ・エイド」(1985年)をまねたものであろうが、いかにも軽薄である。もっと

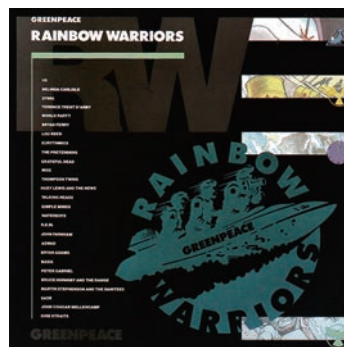


図7 CD『グリーンピース・エイド—地球の自然保護と調和』(Rainbow Warriors)⁴¹

も、グリーンピースに印税を寄付する（グリーンピースを救済する）CDなので、その意味からすれば、ふさわしいのかもしれない。1989年4月に設立されたグリーンピース・ジャパン⁴²⁾もこのCDの恩恵にあずかったはずである。ちなみに筆者は中古版CDを480円で購入しているので、グリーンピースに印税はわたっていない。

プリテンダーズ (The Pretenders)、ブレンダ・カーライル (Brenda Carlisle)、ブライアン・フェリー (Bryan Ferry)、ステイング (Sting)、グレイトフル・デッド (Grateful Dead)、ルー・リード (Lou Reed)、ブライアン・アダムス (Bryan Adams)、ピーター・ゲイブリエル (Peter Gabriel)、ジョン・クーガー・メレンキャンプ (John Cougar Mellencamp)、ダイアー・ストレイツ (Dire Straits) (収録順) ほか全31組31曲収録のCDは、グリーンピース自体に好き嫌いがあったとしても、ロック・ミュージック愛好家であるならば購入したくなる（それゆえ、筆者も中古版を購入した）。以下、このCDに「サムバディ」(Somebody)を提供した筋金入りの反捕鯨活動家ブライアン・アダムスを取り上げる。

「サムバディ」は1985年に全米第11位を記録したヒット曲で⁴³⁾、筆者も「アイ・ニード・サムバディ、サムバディ・ライク・ユー……」と口ずさんでいた記憶がある。当時は恋人のことを歌った曲と考えていたが（多分、その部分しか歌詞が聞き取れなかった）、共作者によれば、アダムスも彼も第一次世界大戦の歴史に関心があるとのことで⁴⁴⁾、この事実と歌詞（下記）を考え合わせてみれば、戦友・同志のことを歌った曲、あるいは反戦歌とも解釈できる。少なくとも反捕鯨の歌ではない。

I've been lookin' for someone between the fire and flame. / 私は火と炎の間で誰かを探し続けてきた。

We're all lookin' for somethin' to ease pain. / 私たちは苦痛を和らげるために何かを求めている。

I need somebody, somebody like you. / 私にはあなたのような誰かが必要です。

Everyone needs somebody. / みんな誰かが必要です。

When you're out on the front line and you're watchin' them fall, / あなたが前線に出て、彼らが倒れるのをみれば、

It doesn't take long to realize it ain't worth fightin' for. / すぐに戦う価値がないことがわかります⁴⁵⁾。

アダムスは28歳の時（1987年）、ヴィーガンになったと語っている⁴⁶⁾。従って、「サムバディ」を発表した頃（1985年）にはまだ反捕鯨ではなかったと思われるが、同曲をグリーンピースに提供した時（1989年）には自らの身体と健康との関係を意識し始め、肉食を忌避する立場

から、反捕鯨になっていたのかもしれない。

1992-94年のツアー時、アダムスは当時グリーンピース・インターナショナルの会長であったデヴィッド・マックタガート (David McTaggart) とともに南極海に鯨類保護区を設定することを目的とした「南大洋鯨類サンクチュアリー」(Whale Sanctuary in the Southern Ocean) 設定キャンペーンを実施している。2人はアダムスのコンサート会場で、国際捕鯨委員会において南大洋鯨類サンクチュアリーの設定に反対している国々の政治家に賛成するように促すハガキ 50 万枚を配布している⁴⁷⁾。このキャンペーンが直接影響したのか否かは不明であるが、1994年にメキシコで開催された第46回国際捕鯨委員会年次会議において「南大洋鯨類サンクチュアリー」は賛成多数で設定が承認されている (IWC 1995: 27-29)。

カナダ生まれのアダムスであるが、2002年以降はカリブ海にあるセント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国 (以下、「セント・ヴィンセント国」と表記) のムスティック島に住居を構えている⁴⁸⁾。ムスティック島は一法人が島全体を保有し、高級リゾート地として開発されているセレブ御用達の島である。同島はミック・ジャガー (Mick Jagger) が別荘を所有し、またデヴィッド・ボウイ (David Bowie) も別荘を所有していたことで知られている (Doyle 1996: 208)。

その一方、ムスティック島とその北西に位置するベクウェイ島との間の海域ではザトウクジラ捕鯨が実施されており、ベクウェイ島の鯨捕りたちは慣習的にムスティック島を立寄り地として利用してきたという歴史がある (浜口 2016: 97-99) (図 8)。

2016年3月、アダムスはベクウェイ島出身の女性弁護士 (セント・ヴィンセント国元首相の次女)、ムスティック島に住むイギリスの投資会社の CEO とともに「セント・ヴィンセントおよびグレナディーン諸島国保存基金」(St. Vincent and the Grenadines Preservation Fund: SVGPF) を設立し⁴⁹⁾、反捕鯨活動を開始している。アダムスとともに SVGPF を結成した女性弁護士は2012年以降、別団体の活動を通して、ベクウェイ島において長年にわたって実施されてきたザトウクジラ捕鯨をホエール・ウォッチングに転換する運動にかかわってきた人物である (浜口 2016: 145-148)。

2017年5月、SVGPF が資金提供し、ベクウェイ島でのザトウクジラ捕鯨にかかわっている捕



図 8 ムスティック島に停泊中の捕鯨ボート (セント・ヴィンセント国、1997年3月22日、筆者撮影)

鯨チームのリーダーの息子、セント・ヴィンセント島におけるコビレゴンドウ捕鯨の中心人物の弟ら計3人を、ホエール・ウォッチングを体験させるためにアメリカ合衆国ボストンに派遣している⁵⁰⁾。

2019年4月、アダムスはベクウェイ島の鯨捕りたちが追跡していたザトウクジラと捕鯨ボートの間に手漕ぎボートで割り込み、鯨捕りたちの鉤打ちを妨害、捕鯨を失敗に追い込んでいる⁵¹⁾。反捕鯨活動家としては面目躍如であったが、地元の鯨捕りたちにとっては迷惑この上ない破壊活動であった。

『グリーンピース・エイド』に楽曲を提供した31組のミュージシャン全てがアダムスのような確信犯的な反捕鯨活動家ではないであろう。環境保護という名の下、安易に反捕鯨団体に協力することについては、ぜひ再考してもらいたいものである。

5. 再びイルカに出会う時

2010年、第82回アカデミー賞の長編ドキュメンタリー部門を受賞した作品が『ザ・コーブ』(The Cove)である(図9)。本作品は和歌山県太地町において実施されているイルカ類の追い込み漁⁵²⁾を隠し撮りし、イルカ類の屠殺場面をことさら強調(ウシでもブタでもニワトリでも人間の食用に屠殺される場面を見せられれば、残酷と感じます)、事実と虚偽をすり替え脚色したノンフィクションにみせかけたフィクション映画である。

もっとも、同じ太地町のイルカ類の追い込み漁を題材とした映画『おクジラさま—ふたつの正義の物語』(2017年)を製作監督した佐々木芽生によれば、「実際のドキュメンタリー『映画』とは、作家が独自の視点で事実を自由に切り貼りして、言いたいことを訴える表現手段というのが世界的理解だ。つまり、ある程度事実に沿っていけば、偏った見方で伝えることには何の問題



図9 DVD版『ザ・コーブ』(The Cove)⁵³⁾

もない」(佐々木2017:31-32)とのことで、この『ザ・コーブ』もこの種の世界基準には適っているのかもしれない。そしてこの映画に主役級として出演していたのが、第2節、第3節で取り上げたリック・オバリーである。

オバリーは1977年、ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートにあわせて来日した際にも太地町に立ち寄っているが、その時はイルカ類の追い込み漁については知らなかったようで、追い込み漁を知る目的で太地町を訪れたのは、2003年10月である(伴野2015:168-169)。そのオバリーに太地町のイルカ類の追い込み漁についての情報をもたらしたのが、ポール・ワトソンからの一本の電話であった(伴野2015:168)⁵⁴⁾。

その電話から1か月後の2003年11月、ワトソンの当時の

妻ら2人が太地町畠尻湾の仕切り網内に捕獲されていたハナゴンドウ15頭を逃がそうとして仕切り網を切断（結局は失敗）、和歌山県新宮警察署員に威力業務妨害容疑で逮捕・起訴され、略式命令を受け入れて罰金80万円を納付、国外強制退去処分となっている（浜口2005:41-42）。この事件の前後から、ワトソン率いる団体の構成員は太地町において様々な違法行為、脱法行為を繰り返している。オバリーは、自らが率いる団体はワトソン率いる団体とは異なっていることを強調しているが（佐々木2017:261-262）、この2人が反捕鯨（反イルカ漁）の名の下でつながりがあることは明白である⁵⁵⁾。

2014年9月1日、イルカ類の追い込み漁解禁日にあわせて太地町を訪問した筆者は、岐阜ナンバーの観光バスでやってきていたオバリー率いる団体の構成員と遭遇した。同意を得て撮影した写真1枚を掲げておく（図10）。写真をみればわかるように、ビーチ・サンダルを履いている者、イヌを連れている者もある。命懸けで行う抗議活動であるならば、このような格好はとらないであろう。観光気分は明らかであった。写真撮影後、その中の1人と立ち話をした。彼はブラジルから就労のために来日している日系ブラジル人で「ブラジルには仕事がないので、日本に働きに来た。太地の人も、イルカ漁を止めても、世界のどこかに働く場所があるでしょう……」と語っていた。話の後段は勝手な理屈であった。



図10 イルカ解放活動家たち（和歌山県太地町、2014年9月1日、筆者撮影）

映画『ザ・コープ』の話に戻る。映画の最後で出演俳優や製作関係者の名前が流れる場面（クロージング・クレジット）の背景曲として用いられているのがデヴィッド・ボウイの「ヒーローズ」(Heroes)である（図11）。以下、その歌詞をみる。

I, I will be king and you, you will be queen. / 私は王になり、あなたは女王になる。

Though nothing will drive them away, / 彼らを追い払うものは何もないが、

We can be Heroes, just for one day. / 私たちは一日だけならヒーローになれる。

We can be us, just for one day / 一日だけなら一緒になれる。

I, I wish you could swim like the dolphins, like dolphins can swim. / あなたがイルカのように泳

げればいいのに。

Though nothing, nothing will keep us together, / 私たちを結びつけるものは何もないが、

We can beat them, for ever and ever. / 私たちは彼らを永遠に打倒できる。

Oh we can be Heroes, just for one day. / 一日だけならヒーローになれる⁵⁶⁾。

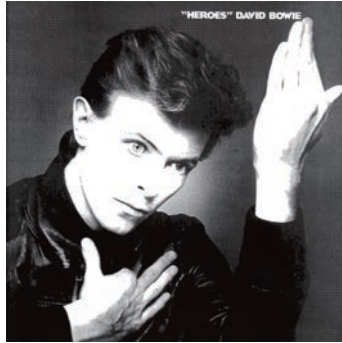


図 11 デヴィッド・ボウイの CD 『ヒーローズ』 (Heroes)⁵⁷⁾

字幕翻訳者の黒澤桂子によれば、この歌はベルリンの壁の前で会っている恋人たちを描いたもので、「イルカのように泳げればいいのに……」という歌詞がでてくるのは、壁を乗り越えてその向こうにある川を渡ろうとして溺死した人たちもいたからだ、とのことであった⁵⁸⁾。共産主義国家（ドイツ民主共和国、いわゆる「東ドイツ」）からの人々の解放をめざす歌にイルカが登場し、その歌をイルカ解放をめざす映画に用いるとは、映画製作者もなかなかやる。のちに東ドイツは崩壊し、ベルリンの壁は破壊されたのだから、映画公開により、太地町の追い込み漁も壊滅し、イルカが解放されると考えたのかもしれない。

実際、オバリーは「[映画の最後に流れる]『ヒーローズ』は人々を再活性化し、追い込み漁の問題を存続させてくれる。時々、私が出会った人々が、私を認識した時、この歌を歌い始める」と語っている⁵⁹⁾。オバリーとしては「ヒーロー」になった気分で気持ちがよかったのであろう。デヴィッド・ボウイのこの歌、映画挿入曲としては、効果があったのは確かである。

ボウイ自身は1972年7月に開催された「クジラを救おう慈善コンサート」に出演しており⁶⁰⁾、半世紀近く前から反捕鯨運動を支援していたようである。『ザ・コープ』の監督レイ・シホヨスによれば、商業映画におけるロック・ミュージックの著作権使用料は最低で2万5000ドル、時には10万ドル以上にもなるが、ボウイは所属レコード会社に著作権使用料が3000ドルになるように働きかけてくれたとのことであった⁶¹⁾。ボウイが反捕鯨運動を支援していなければ、この種の値引きはありえなかったはずである。シホヨスにとって、オバリーにとって、ボウイさままであった。

『ザ・コープ』では、ベビーフェイスを演じたオバリーであるが、2015年8月31日に旅券不携帯というさえない理由で和歌山県新宮警察署員に現行犯逮捕され⁶²⁾、一転ヒールとなった。翌2016年1月には多分その逮捕が災いして、成田空港で東京入国管理局により入国を拒否され、

強制退去処分となっている⁶³⁾。しかしながら、この入国拒否・強制退去処分を不服とするオバリーは処分取り消し求めて東京地裁に提訴し、2019年10月、勝訴している⁶⁴⁾。この勝訴により、オバリーは再びヒーローになる機会を得たことになる。

その一方、新型コロナウイルスによる感染症の拡大を防止するため、日本国政府は2020年4月1日より入国申請日前14日以内にアメリカに滞在歴のある外国人の入国を拒否し⁶⁵⁾、本入国拒否は9月28日時点でも継続している⁶⁶⁾。そのため、オバリーは9月1日の太地町におけるイルカ類の追い込み漁解禁日には、来日できなかったと思われる。新型コロナウイルスによる感染症の拡大がもたらした数少ないよい面の一つであった。今後もオバリーの動向を注視していきたい。

6. 静かにロックを聴きながら……

本稿において考察してきたことの主要結論は以下のとおりである。

1970年代初頭以降、アメリカにおいては環境保護団体、反捕鯨団体およびそれらに所属する個人がロック・ミュージシャンほか芸能人からの寄付を活動資金にしてきた。特に当該団体の設立初期において、団体運営を安定させ、活動を持続化させる点において、ロック・ミュージシャンほかの資金面での協力は大きかった。

一方、ロック・ミュージシャンほか芸能人にとっても、環境保護運動、反捕鯨運動がアメリカ社会において一定の支持がある以上、それに協力することは、知名度の向上と商品（レコード、テープ、CD）の売り上げにプラスとなり、好ましいことであった。それゆえ、クジラやイルカ、あるいは反捕鯨をテーマとする楽曲も製作されてきたのである。

これに対して、官民あげて捕鯨文化の擁護継承に努めてきた日本において、反捕鯨運動に与することは、社会の半数以上を敵に回す恐れがあり、ロック・ミュージシャンほかにとっては営業上の危険性を伴う。それゆえ、1977年に開催されたローリング・ココナッツ・レビュー・コンサート以降、大規模な反捕鯨コンサートは二度と開催されなかったのである。

これらの事実を踏まえたうえで、最後に日本捕鯨の将来を展望しておく。

日本国政府は2018年12月26日、国際捕鯨取締条約からの脱退を発表し⁶⁷⁾、翌2019年7月1日より商業捕鯨を再開している。2019年（暦年）の捕獲実績は次のとおりである。2019年6月末までの鯨類捕獲調査として南極海でのクロミンククジラ333頭⁶⁸⁾、日本沿岸域におけるミンククジラ79頭である⁶⁹⁾。7月1日以降の商業捕鯨としてミンククジラ44頭、ニタリクジラ187頭、イワシクジラ25頭である⁷⁰⁾。全てをあわせれば668頭となる。これに加えて、小型沿岸捕鯨、突きん棒漁、追い込み漁の3漁法による鯨類・イルカ類の捕獲があるが、2019年の捕獲実績は未入手なので、参考として2018年（暦年）の捕獲実績を記しておく。小型沿岸捕鯨としてツチクジラ53頭ほか計55頭、突きん棒漁としてリクゼンイルカ879頭ほか計901頭、追い込み漁としてスジイルカ435頭ほか計894頭、3漁法の合計が1850頭となっている⁷¹⁾。

第3節でみたように、ローリング・ココナッツ・レビュー・コンサートが開催された1977年、日本は南半球と北太平洋において、クロミンククジラ 3950 頭ほか計 9472 頭を捕獲している。数字からみれば、42年後の捕獲数は大幅に減少している。また国際捕鯨取締条約から脱退したことにより、南極海における捕鯨からは撤退した。鯨類資源の宝庫である南極海での捕鯨を断念することは、生物資源の持続的利用の立場からも、あるいは食の安全保障面からも大きな損失である。

しかしながら、国際捕鯨取締条約から脱退し、商業捕鯨を再開することにより、経営的に成り立つ限り捕鯨を半永久的に存続させることを全世界に宣言した象徴的意義は大きい。また科学研究目的の捕獲調査ではなく、商業捕鯨となったため、肉質のよい鯨を選択捕獲できるようになったことも利点である。鯨産物の流通網を整備し、肉質のよい鯨肉を迅速に全国各地に安定供給できるようになれば、経営的にも十分成り立つはずである。一日も早く、経営的に安定した安心のできる商業捕鯨が確立されることを期待して本稿を終えたい。

おわりに

中・高校生の頃は、英語力に乏しかった。回顧してみれば、反捕鯨の歌をそうとは知らずに、曲調のよさだけで聞いていたのである。本稿で取り上げたロック・ミュージシャンの来日コンサートにも何度となく足を運んだが、たとえ彼らが反捕鯨について何かを語っていたとしても、当時の英語力では理解できていなかったであろう（今もそうだが……）。そのようなロック・ミュージックへの個人的なかわりに、長年にわたる捕鯨文化研究の成果を織り込みながら、まとめたのがこの文章である。本稿において過去半世紀を振り返った筆者は、2021年3月末をもって園田学園女子大学短期大学部を定年退職します。ではみなさん、お元気で。

Old soldiers never die ; they just fade away...

謝辞

本稿に対して、石川創（大阪海洋研究所）、大鷲徹（玉川大学）、河島基弘（群馬大学）、岸上伸啓（人間文化研究機構）の各氏および2人の査読者から貴重なご指摘、コメントをいただきました。記して謝意を表します。

注

- 1) Wikipedia, Monterey Pop Festival. https://en.wikipedia.org/wiki/Monterey_Pop_Festival (accessed August 22, 2020).
- 2) 注1)
- 3) Wikipedia, San Francisco (Be Sure to Wear Some Flowers in Your Hair). [https://en.wikipedia.org/wiki/San_Francisco_\(Be_Sure_to_Wear_Some_Flowers_in_Your_Hair\)](https://en.wikipedia.org/wiki/San_Francisco_(Be_Sure_to_Wear_Some_Flowers_in_Your_Hair)) (accessed August 22, 2020).

- 4) 英詞は Genius Lyrics による。
<https://genius.com/Scott-mckenzie-san-francisco-be-sure-to-wear-some-flowers-in-your-hair-lyrics> (accessed August 23, 2020). 和訳は筆者による。
- 5) スコット・マッケンジー「花のサンフランシスコ」日本コロムビア、1967年8月、LL-2070-C。筆者所有。
- 6) ウィキペディア「花のサンフランシスコ」<https://ja.wikipedia.org/wiki/花のサンフランシスコ> (accessed August 22, 2020)。
- 7) マーティン・ルーサー・キング・ジュニア「私には夢がある」1963年。
<https://americancenterjapan.com/aboutusa/translations/2368/> (accessed October 3, 2020)。
- 8) ウッドストック・フェスティバルの参加者数については、北中正和は「30万人とも40万人とも言われた」(北中 2017: 138)、遠藤哲夫は「40万人(50万ともいわれる)」(遠藤 2019: 45)、室矢憲治はウォルター・クロンカイトの言葉を引用する形で「40万人、50万人という数」(室矢 2017: 112)、五十嵐正は「50万人近くともいわれる」(五十嵐 2019 a: 202)としている。結局のところ、来場者が多すぎて、誰も正確な人数は把握できなかったのであろう。
- 9) この2曲はウッドストック・フェスティバルを記録したDVD『ディレクターズカット ウッドストック 愛と平和と音楽の3日間』(ワーナー・ホーム・ビデオ、2000年、1000704728、3時間44分)に収録されており、演奏から50年以上経った2020年の今日でも視聴が可能である。
- 10) 英詩は Songfacts による。
<https://www.songfacts.com/lyrics/counry-joe-the-fish/i-feel-like-im-fixin-to-die-rag> (accessed October 3, 2020)。和訳は筆者による。
- 11) 注9)に記したDVDに収録されている。
- 12) ウィキペディア「ジミ・ヘンドリックス」<https://ja.wikipedia.org/wiki/ジミ・ヘンドリックス> (accessed October 4, 2020)。
- 13) マイケル・ラングは2019年8月に「ウッドストック50周年記念コンサート」の開催を試みたが、資金面、安全面での問題点を解決できず、開催中止となった。「ウッドストック50周年記念フェスの中止、主催者『がっかり』」<https://www.cinematoday.jp/news/N0110538> (accessed October 4, 2020)。
- 14) リック・オバリーの本名はリチャード・バリー・オフエルドマン (Richard Barry O'Feldman) である。
https://en.wikipedia.org/wiki/Ric_O'Barry (accessed January 1, 2020)。彼は時々、リック・オフエルドマン (Ric O'Feldman)、あるいはリチャード・オバリー (Richard O'Barry) を名乗ることもあり、本稿においても、原著を尊重して「リック・オバリー」「リック・オフエルドマン」「リチャード・オバリー」を用いているが、同一人物であることにご注意願いたい。
- 15) 『わんぱくフリッパー』については、河島基弘が詳しく解説している(河島 2011: 153-157)。
- 16) Ric O'Barry's Dolphin Project, Our History. <https://www.dolphinproject.com/about-us/history/> (accessed March 17, 2020)。
- 17) 注16)
- 18) Wikipedia, Fred Neil. https://en.wikipedia.org/wiki/Fred_Neil (accessed March 23, 2020)。
- 19) 英詞は注20)に記したCD所収のラーナーノーツに記載されていた歌詞による。和訳は筆者による。
- 20) Fred Neil, *Fred Neil*. EMI Music Special Markets, 2006, water 165. 筆者所有。
- 21) クロスビー、スティルス&ナッシュの「組曲：青い眼のジュディ」も注9)に記したDVDに収録されている。
- 22) 注18)
- 23) Crosby, Stills & Nash, *Crosby, Stills & Nash*. Atlantic Recording Corporation, 2006, 8122-73290-2。
- 24) 引用文(翻訳書)は縦書きで、漢数字が用いられている。これに対して、本稿は横書きなので、漢数字をアラビア数字に変更している。本稿中、全ての引用文における漢数字はアラビア数字に変更している。

- 25) このケント州立大学生射殺事件に抗議して1970年6月にシングル版として発表されたのが、クロスビー、スティルス、ナッシュ&ヤング (Crosby, Stills, Nash & Young) の歌「オハイオ」(*Ohio*)である。[https://en.wikipedia.org/wiki/Ohio_\(Crosby,_Stills,_Nash_&_Young_song\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Ohio_(Crosby,_Stills,_Nash_&_Young_song)) (accessed October 5, 2020).
- 26) Joni Mitchell, Greenpeace Benefit Concert. <https://jonimitchell.com/chronology/detail.cfm?id=1295> (accessed October 11, 2020).
- 27) なお梅崎は、ベトナム戦争における枯葉剤使用による環境破壊から世界の目をそらすためにアメリカ合衆国が捕鯨モラトリアムを提案したとする説に加えて、同国大手製油会社がマッコウ油と同品質の潤滑油を開発し、同社の利益のためにマッコウ油を市場から追放する必要がある、それがアメリカ合衆国政府の捕鯨禁止政策策定につながったとする説もあわせて提示している(梅崎1986:106-108)。このアメリカ合衆国によるマッコウ油陰謀説に着目した石川創は、CIAとグリーンピースのつながり、グリーンピースによるソビエト連邦捕鯨船団への妨害活動などから、重要な軍事物資であったマッコウ油のソビエト連邦による入手を妨害するために、アメリカ合衆国政府が捕鯨禁止政策を推進したとする新説を提出している(石川2018:9-12)。
- 28) 『朝日新聞』1977年4月9日付け夕刊、7面。本件資料の入手に際しては、朝日新聞名古屋本社報道センター、初見翔記者にお世話になりました。記して謝意を表します。
- 29) Jim Mockford, October 20, 2012, Rolling Coconut Review [*sic*] Concert Japan April 10, 1977. <https://mockford.wordpress.com/2012/10/20/rolling-coconut-review-japan-concert-april-10-1977/> (accessed March 31, 2020).
- 30) Danny O'Keefe, *The Global Blues*. Warner Brothers Records/Wound Bird Records, 2006, WOU 3314. 筆者所有。
- 31) 英詩は Oldielyrics による。https://www.oldielyrics.com/lyrics/danny_okeefe/save_the_whales.html (accessed August 22, 2020)。和訳は筆者による。
- 32) 英詩は Oldielyrics による。https://www.oldielyrics.com/lyrics/crosby_nash/to_the_last_whale.html (accessed March 17, 2020)。和訳は筆者による。
- 33) Country Joe McDonald, *Paradise with an Ocean View*. Fantasy Records, 1994, FCD-9495-2. 筆者所有。
- 34) 英詞は注33)に記したCD所収のラーナーノーツに記載されていた歌詞による。和訳は筆者による。
- 35) ドルフィン・プロジェクト・ジャパン・コンサート・コミッティー『Rolling Coconut Revue Japan Concert 1977』2018年、東京：ディスクユニオン。
- 36) グリーンピース・ジャパン「グリーンピースについて」<https://www.greenpeace.org/japan/about-us-2/> (accessed October 11, 2020)。
- 37) グリーンピース・ジャパン「グリーンピース声明：アイスランドから日本への絶滅危惧種ナガスクジラの違法取引に反対」<https://www.greenpeace.org/japan/nature/press-release/2018/11/12/1326/> (accessed October 11, 2020)。
- 38) 外務省「ワシントン条約(絶滅のおそれのある野生動植物の種の国際取引に関する条約)」<https://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/kankyo/jyoyaku/wasntn.html> (accessed October 11, 2020)。
- 39) CITES, Reservations entered by Parties. <https://www.cites.org/eng/app/reserve.php> (accessed October 11, 2020)。
- 40) International Union for Conservation and Nature (IUCN), November 14, 2018, Fin Whale, Mountain Gorilla recovering thanks to conservation action—IUCN Red List. <https://www.iucn.org/news/species/201811/fin-whale-mountain-gorilla-recovering-thanks-conservation-action-iucn-red-list> (accessed November 28, 2018)。
- 41) 『グリーンピース・エイド—地球の自然保護と調和』ポニーキャニオン、1989年6月、D32Y0312。筆者所有。
- 42) グリーンピース・ジャパン「団体情報」<https://www.greenpeace.org/japan/about-us-2/> (accessed October

- 11, 2020).
- 43) Wikipedia, Somebody (Bryan Adams song). [https://en.wikipedia.org/wiki/Somebody_\(Bryan_Adams_song\)](https://en.wikipedia.org/wiki/Somebody_(Bryan_Adams_song)) (accessed April 14, 2020).
 - 44) <https://www.songfacts.com/facts/bryan-adams/somebody> (accessed April 14, 2020).
 - 45) 英詩は [genius.com](https://genius.com/Bryan-adams-somebody-lyrics) による。 <https://genius.com/Bryan-adams-somebody-lyrics> (accessed April 13, 2020). 和訳は筆者による。
 - 46) Jodi Monelle, Bryan Adams Promotes Veganism to Millions of Fans in Latest Facebook Post. <https://www.livekindly.co/bryan-adams-promotes-veganism-millions-fans-latest-facebook-post> (accessed April 13, 2020).
 - 47) Wikipedia, Bryan Adams. https://en.wikipedia.org/wiki/Bryan_Adams (accessed April 13, 2020).
 - 48) Singer Bryan Adams inspires creation of SVG Preservation Fund (SVGPF), *iWitness News*, March 31, 2016. <https://www.iwnsvg.com/2016/03/31/singer-bryan-adams-inspires-creation-of-svg-preservation-fund-video/> (accessed June 16, 2017).
 - 49) 注 48)
 - 50) Relatives of Vincy whalers go whale watching in Boston, *iWitness News*, May 28, 2017. <https://www.iwnsvg.com/2017/05/28/relatives-of-vincy-whalers-go-whale-watching-in-boston/> (accessed May 29, 2017).
 - 51) Mustique homeowner acts as human shield to prevent killing whale, *Searchlight*, April 26, 2019. <https://searchlight.vc/searchlight/front-page/2019/04/26/mustique-homeowner-acts-as-human-shield-to-prevent-killing-whale/> (accessed May 3, 2019).
 - 52) 太地町において実施されているイルカ類の追い込み漁については、関口雄祐が正確に記述し、考察している (関口 2010)。また日本各地で実施されてきたイルカ類の追い込み漁の歴史と実態については、中村羊一郎が詳細にまとめている (中村 2017)。
 - 53) Oceanic Preservation Society 『ザ・コープ』 ポニーキャニオン、2011 年 2 月、PCBE 53787。筆者所有。
 - 54) ワトソンが率いる団体のホームページには、「2003 年に太地町を訪れた同団体の最初の一団の一人がリック・オバリーであった」と記されている (Sea Shepherd Global, September 1, 2017, Sea Shepherd must adapt to more effectively defend dolphins. <https://www.seashepherdglobal.org/latest-news/taiji-dolphins/> (accessed November 30, 2020)。
 - 55) ウィキペディアの「リック・オバリー」のページには、「シーシェパードの顧問会議に名をつらねていたものの、現在はその名前を除去」と記されている。 <https://ja.wikipedia.org/wiki/リック・オバリー> (accessed November 30, 2020)。
 - 56) 英詞は注 57) に記した CD 所収のラーナーノーツに記載されていた歌詞による。和訳は筆者による。
 - 57) David Bowie, *Heroes*. Parlophone Records, 1999, WPCR-80095。筆者所有。
 - 58) 黒澤桂子「ベルリンの壁崩壊とボウイ&フランプトン」 <https://www.jvta.net/blog/20190614/justice/> (accessed March 23, 2020)。
 - 59) David Kirby, David Bowie Is a Hero to Activists Fighting the Dolphin Slaughter in Japan. <http://www.takepart.com/article/2016/01/13/david-bowie-saved-whales/> (accessed October, 17, 2019)。
 - 60) David Bowie—Poster Friends of the Earth Save the Whale Benefit. <https://recordmecca.com/item-archives/david-bowie-poster-friends-of-the-earth-save-the-whale-benefit/> (accessed April 1, 2020)。
 - 61) 注 59)
 - 62) 産経ニュース「イルカ漁妨害の『大物活動家』今度は和歌山で自損事故 旅券不携帯逮捕につづき『早く出て行って』と地元民」(2015 年 9 月 2 日) <https://www.sankei.com/affairs/news/150902/afr1509020008-n1.html> (accessed April 23, 2020)。
 - 63) 週間金曜日オンライン「入国拒否・長期拘束の末、イルカ漁反対の活動家で『ザ・コープ』主演者を

- 強制退去」(2016年2月26日) <http://www.kinyobi.co.jp/kinyobinews/2016/02/26/入国拒否・長期拘束の末、イルカ漁反対の活動家/> (accessed April 23, 2020).
- 64) 朝日新聞デジタル「イルカ保護活動家の入国拒否は違法 地裁が処分取り消し」(2019年10月3日) <https://www.asahi.com/articles/ASMB35JHXMB3UTIL02.C.html> (accessed April 23, 2020).
- 65) 在サンフランシスコ日本国総領事館「日本における米国等からの入国者に対する水際対策の強化(4月1日掲載)」(2020年4月1日) https://www.sf.us.emb-japan.go.jp/itpr_ja/anzen_20_0401.html (accessed October 15, 2020).
- 66) 出入国在留管理庁「新型コロナウイルス感染症の拡大防止に係る上陸拒否について」(令和2年9月28日現在) <http://www.moj.go.jp/content/001327502.pdf> (accessed October 16, 2020).
- 67) 内閣官房長官記者会見「国際捕鯨取締条約からの脱退について」(平成30年12月26日(水)午前) https://www.kantei.go.jp/jp/tyoukanpress/201812/26_a.html (accessed January 10, 2020).
- 68) 水産庁「平成30年度新南極海鯨類科学調査の終了について」(平成31年3月31日) <https://www.jfa.maff.go.jp/j/press/kokusai/190331.html> (accessed May 6, 2019).
- 69) 水産庁「平成31年度北西太平洋鯨類科学調査(太平洋側沿岸域調査)の終了について」(令和元年5月27日) <https://www.jfa.maff.go.jp/j/press/kokusai/190527.html> (accessed July 14, 2020); 「平成31年度北西太平洋鯨類科学調査(オホーツク海側沿岸域調査)の終了について」(令和元年6月25日) <https://www.jfa.maff.go.jp/j/press/kokusai/190625.html> (accessed July 14, 2020).
- 70) 水産庁「令和2年の捕鯨業の捕獲枠について」(令和元年12月20日) <https://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/attach/pdf/index-40.pdf> (accessed December 21, 2019).
- 71) 吉田英可「日本の小型鯨類調査研究についての進捗報告2018年4月から2019年3月(統計データは2018暦年)」 <https://www.jfa.maff.go.jp/j/whale/attach/pdf/research-3.pdf> (accessed July 14, 2020).

文献

ブラウン、マイケル&ジョン・メイ

1995 『グリーンピース・ストーリー』(中野治子訳) 東京: 山と溪谷社。

Doyle, Chris

1996 *Sailors Guide to the Windward Islands*, 8th edition. Dunedin, FL: Cruising Guide Publications.

DPICC (ドルフィン・プロジェクト・ジャパン・コンサート・コミッティー)

2018 『Rolling Coconut Revue Japan Concert 1977』(CDセット付録ブックレット、全96頁) 東京: デイスクユニオン。

遠藤哲夫

2019 「ウッドストックとはなんだったのか—開催から50年、各種資料で明らかになった規格外のイベントの実態」『レコード・コレクターズ』38(9): 42-47. [2019年9月号]

フリス、サイモン

1991 『サウンドの力—若者・余暇・ロックの政治学』(細川周平・竹田賢一訳) 東京: 晶文社。

後藤美孝

1977 「〈60年代の夢〉へのジャクソンの問いかけ」『ニューミュージック・マガジン』9(5): 86-90. [1977年5月号]

浜口 尚

2005 「海の蛮人騒動記—シー・シェパードによる鯨・イルカ類追い込み漁仕切り網切断事件をめぐって」『園田学園女子大学論文集』39: 41-52.

2016 『先住民生存捕鯨の文化人類学的研究—国際捕鯨委員会の議論とカリブ海バクウェイ島の事例を中心に』 東京: 岩田書院。

浜野サトル

1977 「とにかく実現できたという事実を大切にしたい」『ニューミュージック・マガジン』9(7): 52-

55. [1977年6月号]

ハンター、ロバート

1985 『虹の戦士たち—グリーンピース反核航海記』(瀧脇耕一訳)(教養文庫 1131) 東京: 社会思想社。
五十嵐正

2019a 「History of Rock Festival—葛藤のフェスティバル史」『ウッドストック 1969—ロックフェスの始まり、熱狂の終わり、50年目の真実』(文藝別冊) 東京: 河出書房新社、202–211頁。

2019b 「ヒッピー再考—もうひとつの社会を夢見たムーヴメントはサイバー社会の種を蒔いたのか」『レコード・コレクターズ』38(9): 48–53. [2019年9月号]

石川 創

2011 『クジラは海の資源か神獣か』(NHK ブックス 1172) 東京: NHK 出版。

2018 「月とマッコウクジラ—鯨と、アメリカと、宇宙開発」『鯨研通信』479: 5–12.

岩永正敏

1982 『輸入レコード商売往来』 東京: 晶文社。

IWC (International Whaling Commission)

1977a Chairman's Report of the Twenty-Seventh Meeting. *Report of the International Whaling Commission* 27: 6–15.

1977b International Whaling Commission Report 1975–76. *Report of the International Whaling Commission* 27: 16–20.

1977c Chairman's Report of the Twenty-Eighth Meeting. *Report of the International Whaling Commission* 27: 22–35.

1978 International Whaling Commission Report 1976–77. *Report of the International Whaling Commission* 28: 6–10.

1979 International Whaling Commission Report 1977–78. *Report of the International Whaling Commission* 29: 7–11.

1995 Chairman's Report of the Forty-Sixth Annual Meeting. *Report of the International Whaling Commission* 45: 15–52.

河島基弘

2011 『神聖なる海獣—なぜ鯨が西洋で特別扱いされるのか』 京都: ナカニシヤ出版。

北中正和

1976 『アロン・トッゲザー—ロックの扉を通して』 東京: 而立書房。

1977a 「歌に託したジャクソンの思いがストレートに」『ニューミュージック・マガジン』9(5): 91–95. [1977年5月号]

1977b 「3日にわたって次から次へと登場したアーティストたち—合計20時間の大会大コンサートを詳細レポート」『ニューミュージック・マガジン』9(7): 43–51. [1977年6月号]

2017 『ロック史』(立東舎文庫) 東京: 立東舎。

ラング、マイケル

2012 『ウッドストックへの道—40年の時空を超えて主宰者が明かすリアル・ストーリー』(室矢憲治訳) 東京: 小学館。

マコーワー、ジョエル

1991 『ウッドストック—1969年・夏の真実』(寺地五一訳) 東京: 新宿書房。

松岡 完

2001 『ベトナム戦争—誤算と誤解の戦場』(中公新書 1596) 東京: 中央公論新社。

森下丈二

2019 『IWC 脱退と国際交渉』 東京: 成山堂書店。

室矢憲治

- 2017 『'67～'69 ロックとカウンターカルチャー 激動の3年間—サマー・オブ・ラブからウッドストックまで』東京：河出書房新社。
- 中村とうよう [訳編]
1977 「どん底生活を体験したほくにとつてのローリング・ココナッツ—カントリー・ジョー・マクドナルドの告白」『ニューミュージック・マガジン』9(7)：34-42. [1977年6月号]
- 中村羊一郎
2017 『イルカと日本人—追い込み漁の歴史と民俗』東京：吉川弘文館。
- オバリー、リチャード
1994 『イルカがほほ笑む日』(夏川道子・糸永光子訳) 東京：TBS プリタニカ。
オフエルドマン、リック
1976 「環境保護の国際的連帯を！」(阿部紀子訳)『話の特集』130：24-25. [1976年11月号]
- 大寫 徹
2016 「鯨のためのロック・コンサート『ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン』—開催経緯と音楽雑誌における評価を中心に」『JASPM NEWSLETTER』28(1)：16-17。
2020 「対抗文化的連帯にもとづく音楽フェスティバルの再考—1977年「ローリング・ココナッツ・レビュー・ジャパン」における国際交流を例に」『玉川大学リベラルアーツ学部研究紀要』13：13-21。
- 大鷹俊一
2019 「[仮想ドキュメント] ウッドストックの三日間」『ウッドストック 1969—ロックフェスの始まり、熱狂の終わり、50年目の真実』(文藝別冊) 東京：河出書房新社、43-110頁。
- ローザック、シオドア
1972 『対抗文化の思想—若者は何を創りだすか』(稲見芳勝・風間禎三郎訳) 東京：ダイヤモンド社。
- 真田康弘
2011 「捕鯨問題の国際政治史」石井敦 [編著]『解体新書「捕鯨論争」』東京：新評論、65-113頁。
- 佐々木芽生
2017 『おクジラさま—ふたつの正義の物語』東京：集英社。
- 関口雄祐
2010 『イルカを食べちゃダメですか?—科学者の追い込み漁体験記』(光文社新書473) 東京：光文社。
- 砂田一郎
1969 『ラジカル・アメリカ—反国家の世代』(三一新書670) 東京：三一書房。
- 竹林修一
2019 『カウンターカルチャーのアメリカ—希望と失望の1960年代』(第2版) 岡山：大学教育出版。
- 伴野準一
2015 『イルカ漁は残酷か』(平凡社新書785) 東京：平凡社。
- 梅崎義人
1986 『クジラと陰謀—食文化戦争の知られざる内幕』東京：ABC出版。
- 渡辺 潤
2000 『アイデンティティの音楽—メディア・若者・ポピュラー文化』京都：世界思想社。
- ヤン、マニュエル
2019 「ウッドストックから DRUM まで—資本と階級闘争の揺れ動く指標としてのカウンターカルチャー」『ウッドストック 1969—ロックフェスの始まり、熱狂の終わり、50年目の真実』(文藝別冊) 東京：河出書房新社、150-175頁。

[はまぐち ひさし 文化人類学]